F/T09 フェスティバル/トーキョー

PRESS RELEASE

新作 『ユートピア？』

作・演出：
平田オリザ （日本）
アミール・レザ・コヘスタニ （イラン）
シルヴァン・モーリス （フランス）

3 月 23 日（月）～29 日（日）

於：あうるすぽっと （豊島区立舞台芸術交流センター）

（c） Fred Kihn

世界初、日・イラン・仏の共同制作が描き出す、国際共同制作の最高到達地点
『ユートピア？』。3 ヶ国の演出家と俳優たちによる言語・文化の差異を超えた
メタ・メタ演劇構造は、演劇をユートピアに到達させ得るだろうか！？

お問合せ：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207
制作担当：クラウトハイム・ウルリケ u-krautheim@anj.or.jp F/T 広報担当：及位（のぞき）、ハッセル toiawase@anj.or.jp

作品について

フランス演劇界に新風を吹き込んだ『別れの唄』の平田オリザと、ヨーロッパ各地の演劇祭を破竹の勢いで席巻するアミール・レザ・コヘスタニ。そして二人の活動に強い関心を持つにいたったブザンソン国立演劇センター芸術監督のシルヴァン・モーリス。お互いの出会いが世界の演劇の常識－すなわちテキストによる芸術の常識を覆すと信じて、時間をかけて対話を繰り返し、強固な作品構造を生み出した。

その1. 平田オリザ作・演出『クリスマス・イン・テヘラン』(新作)

第 1 のパートは平田オリザ定番のウェルメイドな現代口語演劇小作品。

テヘラン郊外、1979 年のイスラム革命前に、アメリカ資本のもと建設されたスキーリゾートホテルは、いまでは人気も下火となり、ひっそりと営業を続けている。再開発に乗り出そうとする日本の企業からは、社員とホテルマン(女性)が送り込まれ、経営再建のエキスパートでもある敏腕ホテル支配人をフランスから呼び寄せる。彼に続いて妻、そしてひそかに支配人と関係を持つ妻の妹もスキー場に到着する。かつて子供をなくした日本人の夫妻。リゾートホテルを守ってきたイラン人従業員。そしてホテル再開発の鍵を握るイラン人オーナー夫妻・・・。

クリスマスイブの夜を、遠く異教の地で迎える人々。それぞれの集団が抱える人間関係と 宗教観の交錯に明快に描きだす。

その2. アミール・レザ・コヘスタニ作・演出 タイトル未定

第 2 のパートでは、コヘスタニが斬新な手法を用いて 3 ヶ国の言語が紡いだ「世界」を脱構築する。平田の描く『クリスマス・イン・テヘラン』を演じた 9 名の俳優、3 ヶ国の言語。その楽屋裏の混乱をデフォルメしつつ、観客も一番気になる俳優たちの異文化交流との構造による創作の混沌を描く。コミュニケーション・ツールとしての言語が音声としてのみ役割を得る時、文字が記号としての役割を果たしきれない時、それらを頼りに舞台上で相対する俳優たちはどのように繋がっていくのか、あるいは隔てられていくのか。

その3. プロローグ・エピローグ シルヴァン・モーリス

平田とコエスタニ、それぞれの作品を結びつけるのは、モーリスによる、ドキュメンタリータッチのプロローグとエピローグ。日本人とイラン人の作・演出家を起用し、「みんなで力をあわせて」ひとつの作品創りに挑む西洋人演出家の妄想を淡々と描く。三人の演出家による、日本・イラン・フランスのメタ・メタ演劇の創作の成功のあかつきには、『ユートピア』が待っている？ 険しい道のりに果敢にも世界で最初に乗り出した男、シルヴァン・モーリスをカメラが追う。

平田オリザ　フランスでの共同制作事業の展開

これまで10年に及ぶ、平田オリザのフランスを中心としたヨーロッパでの仕事の発端は、1998年FIFAワールドカップ・フランス大会関連文化事業“Du monde entier”にさかのぼる。ワールドップ本戦進出32カ国から現代戯曲を選定し、リーディング公演を行うこの試みにおいて、平田オリザ作『東京ノート』は「日本代表」に選ばれ、仏語翻訳・出版がなされた。平田はこの演出を手がけたフレデリック・フィスバックと、本作のフランスでの上演をめざして共同作業を始めた。99年の『われらヒーロー』での共同演出をへて、翌年フランスでのツアー公演がスタートすると、『東京ノート』はリベラシオンでの特集をはじめ、フランス国内の新聞、雑誌に多く取り上げられ話題となった。2002年秋には、『東京ノート』で青年団初のヨーロッパツアー公演を敢行し（日本語上演／各国語字幕付上演）、毎公演後のトークショーで紹介された平田の演劇観や方法論は大きな反響を呼んだ。

『東京ノート』が、北米、韓国、香港、オーストラリアにおいて次なる展開を見せるかたわらで、02年に青年団の俳優を起用して『インディア・ソング』を演出したロラン・グットマンは、翌年ストラスブール国立劇場において、『S高原から』（作：平田オリザ）を上演した。さらに07年には『別れの唄』で平田作品としては初の試みとなる書き下ろし新作フランス初演を果たし、現在は第3シーズン目を迎えて、グットマンが芸術監督を務めるティヨンヴィル国立演劇センター始まって以来の快挙となった。

フランスでの空前の平田ブームは、06年に一気に加速した。フレデリック・フィスバックは同年のアヴィニヨン演劇祭にて『ソウル市民』（作：平田オリザ）を発表し、続いて『職さがし』を青年団とともに手がけたアルノー・ムニエも、同作を引さげてシャイヨー国立劇場のシーズンオープニングを飾った。時を同じくしてパリ日本文化会館にて『S高原から』ヨーロッパツアー中だった平田オリザと青年団は、パリ市内の地下鉄各駅に貼られた『S高原から』のポスターに驚愕した。

ブザンソン国立演劇センターにおいて、新作『ユートピア？』を制作することとなった経緯も、それまでのフランスでの仕事に源流がある。すなわち、フランス中東部の拠点として『別れの唄』巡演先に名乗りを上げていたブザンソン国立演劇センターでは、その後『S高原から』招聘と、09年の新作の制作を決め、ここに3年間に及ぶ協力体制がスタートすることとなった。

08年10月現在、平田オリザと青年団は、『東京ノート』でフェスティバル・ドートンヌ・パリに参加中であり、招聘元のジュヌヴィリエ国立演劇センターでは翌3月にも『砂と兵隊』を発表予定である。また、08年4月にブリュッセルで初演された書下ろし新作『森の奥』など、フランス語圏への進出も目覚しく、08年の『S高原から』ヨーロッパツアー公演（2008）でのイギリス、ドイツ初進出とも相まって、平田の活動はヨーロッパ内での拡張を続けている。このように、異邦の演劇人としての範疇を超え、独自の理論「現代口語演劇」をヨーロッパにおいて浸透させつつ、新しい演劇スタイルの発掘の手も休めることなく、フランス演劇界の第一線に居続ける平田オリザの活動からは、今後も目を放すことができない。

上演記録

青年団・国際共同制作の展開

1998
『東京ノート』リーディング
演出：フレデリック・フィスバック　会場：ジェラール・フィリップ劇場（サン＝ドニ）

1999
『われらヒーロー』
作：ジャン＝リュック・ラガルス／演出：フレデリック・フィスバック、平田オリザ
会場：利賀少年自然の家（富山県利賀村）利賀新緑フェスティバル参加作品／こまばアゴラ劇場（東京）

2000
『東京ノート』フランス公演
演出：平田オリザ、フレデリック・フィスバック　会場：クォーツ劇場（ブレスト）／ラ・ヴィレット（パリ）／ジャン・ルカ劇場（オービュソン）／クレルモン＝フェラン劇場（クレルモン＝フェラン）

2002
『東京ノート』ヨーロッパ公演（青年団）
会場：パリ日本文化会館（パリ）／テアトル・アントワーヌ・ヴィテーズ（エクス・アン・プロヴァンス／テアトロ・バッシェロ（ローマ）／ダブリン演劇祭（ダブリン）
『インディア・ソング』
作：マルグリット・デュラス／演出：ロラン・グットマン
会場：こまばアゴラ劇場（東京）／富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ（埼玉）

2003
『S高原から』
演出：ロラン・グットマン　会場：ストラスブール国立劇場

2006
『職さがし』
作：ミシェル・ヴィナヴェール／演出：アルノー・ムニエ　会場：こまばアゴラ劇場（東京）
『ソウル市民』
演出：フレデリック・フィスバック　アヴィニヨン演劇祭参加作品
『ソウル市民』
演出：アルノー・ムニエ　会場：シャイヨー国立劇場（パリ）他
『S高原から』ヨーロッパ公演（青年団）
会場：パリ日本文化会館（パリ）／テアトル・デュ・ムーランヌフ（スイス・エイグル）／テアトロ・バッシェロ（ローマ）

2007
『別れの唄』
演出：ロラン・グットマン　会場：ティヨンヴィル＝ロレーヌ国立演劇センター／ブザンソン国立演劇センター／ストラスブール国立劇場／シアタートラム（東京）／パリ東劇場　他
『愛のはじまり』
作・演出：パスカル・ランベール　会場：こまばアゴラ劇場（東京）

2008
『東京ノート』
演出：グザヴィエ・ルコムスキー　会場：テアトル・レ・タヌール（ブリュッセル）
『S高原から』ヨーロッパツアー（青年団）
会場：チャプター・アートセンター（カーディフ）／リーズ大学劇場／テアトル・ヴァリア（ブリュッセル）／トリア市立劇場（ドイツ・トリア）／ブザンソン国立演劇センター
『森の奥』
会場：KVS　王立フランドル劇場（ブリュッセル）
『東京ノート』ヨーロッパツアー（青年団）
会場：ジュヌヴィリエ国立演劇センター（パリ郊外）／テアトル・レ・タヌール（ブリュッセル）／ハル大学劇場（ハル・イギリス）

2009
『ユートピア？』
会場：ブザンソン国立演劇センター／あうるすぽっと（フェスティバル／トーキョー参加作品）／ティヨンヴィル・ロレーヌ国立演劇センター／ディジョン国立演劇センター／ベルフォール国立舞台他
『砂と兵隊』
会場：ジュヌヴィリエ国立演劇センター（パリ郊外）

アーティスト・プロフィール

作・演出
平田オリザ　Oriza Hirata （日本）

平田オリザは、日本の現代演劇界で、いまもっとも注目されている劇家・演出家である。 平田は、大学在学中に劇団「青年団」を旗揚げし、以来、一貫した演劇方法論によって、 持続的な活動を続けてきました。
平田の提唱する「現代口語演劇理論」という実践的で新しい演劇理論は、『現代口語演劇のために』などの著作にまとめられ、1990 年代以降の演劇界に強い影響を与え続けている。
また、平田自身が支配人を務める「こまばアゴラ劇場」は、青年団の本拠地であるばかりではなく、日本全国の劇団のほか海外の劇団との相互交流をはかる現代演劇の発信地となっている。平田は、フェスティバル・ディレクターを務めてきた大世紀末演劇展などを通じ、20年近くにわたり、地域の演劇を東京の観客に紹介してきた。
この先見性は、90年代に地域演劇が大きくクローズアップされる原動力となってきた。 99年春には、利賀新緑フェスティバルでもフェスティバル・ディレクターを務めるなど、その活動は、大きな広がりをみせている。
さらに近年は、合同プロジェクトやワークショップを通じて、フランスをはじめ韓国、オーストラリア、アメリカ、アイルランド、カナダなど海外との交流も深めている。2002年に新国立劇場が制作した日韓合同公演『その河をこえて、五月』では、作・演出をつとめ、日韓両国で大きな演劇賞を受賞。07年の日仏合同公演『別れの唄』、日中合同公演『花に嵐のたとえもあるさ』の上演に続き、08年以降も、フランス、韓国、ベルギーなどとの国際共同作業が決定しており、その国際性は、同世代の演劇人の中では他の追随を許さないものである。
02年度からは、新しい教育指導要領に基づく国語教科書の中に、平田のワークショップの方法論が採用され、年間で30万人以上の子供たちが、教室で、演劇を創るようになっている。他にも障害者とのワークショップや、自治体やNPOなどと連携した総合的な演劇教育プログラムの開発など、青年団は他に例を見ない多角的な演劇教育活動を展開。
平田は、00年度より桜美林大学で、演劇専攻教授として教鞭を執り、市民社会に開かれた新しい演劇教育の道を開拓してきました。さらに06年度からは、国立大阪大学コミュニケーションデザイン・センターに移り、社会と演劇の接点をさぐるための研究にあたっている。

劇作家・演出家・青年団主宰。こまばアゴラ劇場支配人。
1962年東京生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。
1995年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞受賞。
1998年『月の岬』で第5回読売演劇大賞優秀演出家賞、最優秀作品賞受賞。
2002年『上野動物園再々々襲撃』(脚本・構成・演出)で第9回読売演劇大賞優秀作品賞受賞。
2002年『芸術立国論』(集英社新書)で、AICT評論家賞受賞。
2003年『その河をこえて、五月』(2002年日韓国民交流記念事業)で、第2回朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。
2006年モンブラン国際文化賞受賞。
現在、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、三省堂小学校国語教科書編集委員、(財)地域創造理事、(財)舞台芸術財団演劇人会議評議委員、 日本演劇学会理事、日本劇作家協会常務理事、独立行政法人国際交流基金「日韓文化交流懇談会」委員。

作・演出

アミール・レザ・コヘスタニ Amir Reza Koohestani （イラン）

劇作家、演出家。1978 年イラン、シラーズ生まれ。16 歳で初めてシラーズの新聞でショート・ストーリーを発表。17 歳でいくつか映画の古典的作品を見た後、映画に夢中になり、映画の演出及び映画技術の勉強を始める。しばらくしてから映画を止める。

当時の結果で未完成の映画 2 本が残っている。96 年（コヘスタニが 18 歳） Mehr 劇団が彼のショート・ストーリーをもとに演劇の公演を企画し、実現には至らなかったが実現されなかったが、コヘスタニが演劇と出会うきっかけとなった。一年間俳優として Mehr 劇団に参加をした後、役者から劇作に転向。99 年に初作品『And the day never came』を書くが、上演は不可であった。2000 年、22 歳で自らの 2 回目の戯曲『The Murmuring Tales』を自身で演出し、第 18 回ファジル演劇祭(イラン)で 5 部門受賞。02 年の『Dance on Glasses』は近年イランでもっとも議論を招き、成功した作品の一つとなり、テアター・デア・ヴェルト（ボン）、チェーホフ国際演劇オリンピック（モスクワ）、ヘッベル劇場（ベルリン）、クンステン・フェスティバル・デザール（ブリュッセル）他で上演された。また、05 年にクンステン・フェスティバル・デザールにて発表された『Amid the Clouds』でヨーロッパを巡演。

03 年にコヘスタニがテヘランで発表した、カナダ人のナディア・ロッスとジャコブ・ウレンの作品のアダプテーション『Recent Experiences』が 07 年 11 月にフェスティバル・ドートンヌ（パリ）の一環でテアトル・ド・ラ・バスティーユにて再演及び巡演になる。同時に『Amid the Clouds』がブザンソン国立演劇センター他で上演された。現在世界が最も注目する非西洋圏劇作家・演出家の一人。

作・演出
シルヴァン・モーリス Sylvain Maurice （フランス）

シャイヨー国立演劇学校卒業。アガト・アレクシ、フィリップ・アドリアン、ジャン＝ピエール・ヴァンサンなどの演出助手をつとめ、1992 年より演出を始める。ドイツ戯曲のレパートリーを愛好し、自らのカンパニー L' Ultime&Co でエデン・ヴォン・ホルヴァート、ゲオルク・カイザー、ヤコブ・レンツ、ローター・トロレやダニイル・ハルムスなどの作品を多く演出している。99 年、ジェヌヴィリエ国立演劇センターでセネカ（古代ローマの哲学者・劇作家）の悲劇『テュエステス』を演出し、高い評価を得、巡演された。

2001 年にアヴィニヨン演劇祭にて『マクベス』（作：シェイクスピア）を発表。03 年よりブザンソン国立演劇センター芸術監督に就任。セネカの『オイディプス』（キャスト：俳優一人と打楽器奏者二人）、ジャン＝リュック・ラガルス作の『L' apprentissage』、エデン・ヴォン・ホルヴァートの『Don Juan kommt aus dem Krieg』やジャン・タルデューの小品から構成された『Un mot pour un autre』を演出している。07 年に E.T.A.ホフマンの『砂男』およびロアルド・ダールの『魔女がいっぱい』を、あやつり人形芝居にしたもの、08 年、演劇センターにて、イプセンの『ペール・ギュント』を演出している。

特別寄稿

『ユートピア？』

サラ・ヤンセン
（評論家・研究家、在ブリュッセル）

世界規模の金融恐慌・経済危機、拡大し続ける格差、軍事紛争の多発化、ナショナリズムの増長と社会の右傾化など、重要な問題を様々に抱える今日において、「ユートピア」という概念に触れるとき、我々は驚異の念を抱くだろう。実際近年の演劇作品のメインテーマとして、これらの危機的情況を目にすることが多いように思われる。舞台芸術においては、かなり暗い世界観を描くものが多く、アーティストは過去の理想主義的な概念、すなわちユートピア的概念の崩壊や精神文明レベルでの危機に果敢に取り組んでいる。その状況の中で、『ユートピア？』という作品では、世界の異なる地域から刺激的なアーティストを集めることによって、今日我々にとって複雑となっているこの概念の意味を追求し、ユートピア的演劇を探る事が目指されているのである。

フランス・ブザンソン国立演劇センター芸術監督であるシルヴァン・モーリスが、非常に異なるコンテクスト、文化的背景において活躍する二人の劇作家・演出家、平田オリザ（日本）とアミール・レザ・コヘスタニ（イラン）にアプローチしたのは、数年前のことだった。40分間で日・仏・イランそれぞれ3名ずつの俳優により多言語で展開される作品を書いて演出してもらうことがねらいである。こうして発した刺激に満ちた出会いを機とし、『ユートピア？』という作品を通じて今日のトピックに対しての三者三様のアプローチ、あるいは対照をなす三つの見解が表されようとしている。

平田オリザによって作・演出される『クリスマス・イン・テヘラン』は、テヘランの郊外のスキーリゾートを舞台に、日本とフランスからやってきたホテル経営者とイラン人のスタッフがアメリカ企業に見放され、倒産寸前のホテルの再建に奮闘するという筋だ。クリスマスをきっかけにホテルを取り巻く人々の間で文化的・宗教的差異が顕在化してくる。一方アミール・レザ・コヘスタニが作・演出する作品では、この平田作品の裏側、つまり平田の芝居が上演されている間に楽屋で起こっていることを描写するような演出となり、私たちが既に観た芝居をもう一度違う側面から観直すと言う事になる。この二つの作品はモーリスの演出によるプロローグとエピローグという枠組みに収められることにより、興味深い演劇作品になるだろう。

平田オリザは、自分自身の作品だけではなく、演劇全体を通して、「対話」（舞台上だけではなく、戯曲とその文脈や背景において）の重要性を多く語り、今まで二言語演劇の様々な可能性を探ってきた。『ユートピア？』において、更に次の段階へと発展していく。『クリスマス・イン・テヘラン』では俳優各人はそれぞれ自分の母語で話し、このことが人物間のやりとりを相当複雑化していくだろう。コヘスタニの作品では、楽屋という設定において、会話は少なくなり、更に曖昧に抽象的に構成されていき、コミュニケーションはもっと決裂していくと考えられる。

このように、このプロジェクトはまず、最初の時点から、多文化的・多言語的な対話が本来的に抱く問題やリスクを取り組んでいる。と言うのは、多文化的・多言語的な対話の複雑性を避けるのではなく、複雑さこそがテキストの構成に織り込まれているからだ。『ユートピア？』はこれらの問題にまっこうから向き合い、それらを公平にプロジェクトの中心にすえている。

平田オリザは演劇を内部から変革していくことが可能であると確信している。欧米や日本の本来の実験的演劇は演劇の決まりごとを解体して、それをまったくゼロから創りなおす必要があると感じていた。それに対し

て、平田の「現代口語演劇」は日本近代演劇の要素を保ちながら、演劇を内部からラディカルに書き直したものである。『ユートピア？』も同様に、国際共同企画における変革の道を歩もうとしている。「今まで、国際共同事業というのは、仲良くするか、あるいは対立を描くかと思います。アミールともこの点について数多く話してきました。イランは我々がよく知らない国ですが、結構普通に生きているところもあります。そういうところを描きたいと思っています。」と平田は語る。[1]

平田オリザの創造する劇世界は我々の日常生活のリアリティと大変似かよっている。しかしながらそのリアルさが奇妙に感じられるものでもある。微妙に何かがズレしている。日仏二ヶ国語の演劇、『別れの唄』(2006)を平田と共同制作したロラン・グットマンは、自身が平田オリザ作『S高原から』(2004)を演出した際、当初戯曲の持つ文脈から反れ、エキゾチシズムに走ってしまわないようにと懸念していたが、その居場所がないような、ある種の疎外感のような感覚が戯曲に組み入れられていることに気がついた。[2]平田の描くミクロコスモスは、実世界、とりわけそのイーブンではない力関係に起因する人間関係を映し出しているのである。その一方で彼が描く人物たちは世界から隔離されているようにも見える。彼らは周囲と繋がったり、積極的に関わったりすることはしないのだ。

アミール・レザ・コヘスタニに多くの賞賛をもたらした『Dances on Glasses』(2001)では、二つのまったく異質な世界から来た少年と少女のストーリーが語られ、その距離は埋めることができず、「激しくて、生々しい感情を生み出す」スタイルで描かれている。[3]国際的フェスティバルを席巻している今シーズンの新作『Quartet: A Journey to the North』でも、人々の距離感やコミュニケーションの欠如が重要なテーマとなっている。『Quartet』の中で、コヘスタニはこの距離感を強調させ、感じせる為に、日常的な言語やドキュメンタリー的要素を非現実的な設定と対比させて見せている。俳優がお互いに背を向けた状態、カメラに対峙するという状態で、ダイレクトなコミュニケーションを避けながらモノローグを発する。観客は舞台の四辺に座っているので実際には自分の正面にいる俳優の顔しか見えず、他の俳優たちはスクリーンに映し出される。このような観客と俳優達との遮断された関係もあいまって、効果は倍増する。

これらの作品では、理想的でパーフェクトな状態の未来よりも、我々が実生活で日々体験していることにずっと近いものを描いている。つまり我々のコミュニケーションの根底にある身ぶり、言いよどみや沈黙(無言)が含まれている日常会話でそういう状況を描いているのだ。目だったアクションが少なく、(確かに両演出家の作品では俳優は座っている場面が多い)物語があまり展開せず、いくつかのストーリーが時々交錯し、その筋は徐々にしか見えてこない。それはアーティストにとってのリアリティを提示し、我々が向き合っている世界の乱雑さを示しているのである。観客は舞台上の世界が、我々の世界とまるで繋がっているかのように、そこに引きこまれていく。パフォーマンスは結果的にきわめて静かで繊細である様でもあり、一方で対峙的で強烈様である様でもある。いずれにしても我々はこの作品を観て、観る前と同じ自分ではいられないのである。

両者の作品は現実の世界に根ざしていながらも、同時にそれを問い直し、覆し、変化させていく。その点で彼らの作品は、ミシェル・フーコーが「ヘテロトピア」と名づけた概念との関係が頭に浮かぶ。フーコーにおいての「ヘテロトピア」は「ユートピア」と違って、或る文化に属するリアルな場所を再生又は再設定する実際に存在する場所や空間である。

---

1 サラ・ヤンセンによる平田オリザへのインタビュー (2008 年 10 月、ブリュッセル市にて)

2 Laurent Gutman による平田オリザへのインタビュー (2002 年 10 月、東京にて) www.theatre-contemporain.net に掲載。

3 J.L. Perrier、「Amir Reza Koohestani, 25 ans, dramaturge à Chiraz」、Le Monde に掲載(2004 年)

『ユートピア？』に関わっている演出家のうち、誰1人として以前楽観視やユートピア的な作品を作ったことで知られている訳ではない。平田は「作品をどう捉えるかによる」と言う。「世界の見方に関しては非常にシニカルなところはあるとは思いますが、一方で全く希望がないかとそうでもないです。そういう世界のなかでどういう風に一日一日を生きているかを考えているともりです。決してその世界に対して楽観的にはなりません。しかし努力をすれば何かが改善するとかそのようの近代主義、進歩的な世界観は全く持っていません。私たちはどうにかして生きていかなければならないわけです。シニカルではあるが、ニヒリズムではないと思っています。」[4]

『ユートピア？』に関わっているアーティストはそれぞれまったく異なったバックグラウンドをもっていながらも同じテーマに関心を示している。3 人とも微妙な文化の違いに興味を持ちながら、グローバルな、普遍的な問題を取り上げている。異なったアプローチや多言語的視点を結びつける過程では類似点と相違点が浮き出され、その中から、自分のもつ文化への新しい視線、新しい読み方、書き方が見出されていく。演劇はこういった微妙な違いを顕在化させる上で、大変重要で効果的な役割を担う芸術だ。

平田は、外国でコミュニケーションを取ることにはいつも困難が付きまとうが、成功したらとても楽しく愉快だと話す。彼らの新作『ユートピア？』では異なる文化や言語間でコミュニケーションの難しさ同様、楽しさを感じさせられれば、と考えているそうだ。ロラン・バルトは『表徴の帝国』において、日本語及び日本文化について観測しえた要素を統合し、そこから新しい「日本」と呼ぶシステムを構成している。そこでは、「日本」は実際の日本国民ではなく、架空の空間、ユートピアのようなものだ。バルトは自分がなれている象徴的システム以外のシステムが存在することが、システムの相違の発見するのに効果的だと言う。「きわめて遠い外国語が微かな光によって、わたしたちに暗示することのできる抜きがたい断絶の姿、そのなかに身体ぐるみ運びこまれるのは、なんとありがたいことか。」[5]こういう異文化コミュニケーションへ積極的なアプローチを間違いなく、『ユートピア？』において我々は眼にすることになるだろう。

サラ・ヤンセン

研究者、ライター、ドラマトゥルク。日本研究（ベルギー、ルーヴェンカトリック大学）及びパフォーマンス研究（ニュー・ヨーク大学）を専攻。2002 年、ローサズ・ダンス・カンパニー創立 20 周年記念の際に行われた美術展 ROSAS XX のアシスタント・キュレーター。（ブリュッセル、パレ・デ・ボザールにて）。それ以降「班女」（2004）及び A Love Supreme/Raga for the Rainy Season（2005）でローサズとのコラボレーションを続ける。2006～2007 年東京在住の振付家、山田うん（Co.山田うん）とブリュッセル在住の振付家篠崎由紀子 deepblue のコラボレーション「ひび」のドラマトゥルクを務める。2008 年王立フランドル劇場（KVS）＆トランスカンカナル制作、平田オリザによるバイリンガル戯曲『森の奥』による公演の翻訳家・ドラマトゥルク。

[4] サラ・ヤンセンによる平田オリザへのインタビュー （2008 年 10 月、ブリュッセル市にて）

[5] ロラン・バルト 「表徴の帝国」、宗佐近訳、ちくま学芸文庫、16 ページ。

キャスト/スタッフ

作・演出	平田オリザ Oriza Hirata アミール・レザ・コヘスタニ Amir Reza Koohestani シルヴァン・モーリス Sylvain Maurice
出演	レザー・ベヘボウディー Reza Behboudi ナディーン・ブルラン Nadine Berland セシル・クスティヤック Cecile Coustillac サイード・チャンギズィアン Saeid Changizian ひらたよーこ Yoko Hirata 古屋隆太 Ryuta Furuya、 井上三奈子 Minako Inoue （いずれも青年団所属、Seinendan） エルハム・コルダン Elham Kordan
ドラマトゥルク	ヤン・リシャール Yann Richard
美術・照明	エリク・ソワイエ Eric Soyer
衣裳	マリー・ラ・ロッカ Marie La Rocca
音響	ジャン・ド・アルメイダ Jean de Almeida
演出助手（コヘスタニ）	マヒーン・サドリー Mahin Sadri
通訳	原真理子（日本語－仏語） Mariko Hara (Japanese-France)、 田中志緒理（日本－ペルシャ語） Shiori Tanaka （Japanese-Persian）
製作	ブザンソン国立演劇センター Centre Dramatique National de Besançon et de Franche-Comté
共同製作	フェスティバル/トーキョー Festival/Tokyo
助成	キュルチュール・フランス Cultures France
協力	国際交流基金（予定） The Japan Foundation （有）アゴラ企画・こまばアゴラ劇場／青年団、Agora Planning Ltd./Seinendan theatre company、Mehr 劇団、 Mehr Theatre Group

le jeune théâtre national

東京公演日本側スタッフ

舞台監督	中西隆雄 Takao Nakanishi
照明	西本 彩 Aya Nishimoto
装置	鈴木健介 Kensuke Suzuki
映像	深田晃司 Koji Fukuda
字幕制作	岩城 保 Tamotsu Iwaki
衣装	有賀千鶴 Chizuru Ariga
制作	西尾祥子 （システマ）Sachiko Nishio （Sistema）、 西山葉子 Yoko Nishiyama
後援	フランス大使館 Ambassade de France au Japan
制作協力	（有）アゴラ企画・こまばアゴラ劇場／青年団 Agora Planning Ltd./Seinendan theatre company
主催	フェスティバル/トーキョー Festival/Tokyo

公演/チケット情報

会場　あうるすぽっと （豊島区立舞台芸術交流センター）
チケット料金　全席指定　一般　4,500 円、学生　3,000 円（要学生証提示）
高校生以下　1,000 円
お取扱い　フェスティバル／トーキョー（HP のみ）、ぷれいす （電話のみ）
電子チケットぴあ（P コード：391-409）、イープラス
あうるすぽっとチケットコール　03-5391-0516
（10：00-19：00/あうるすぽっと 3 階事務所にて販売/郵送不可）
としまみらいチケットセンター　03-3590-5321 （郵送不可）

公演スケジュール

3/23 mon	3/24 tue	3/25 wed	3/26 thu	3/27 fri	3/28 sat	3/29 sun
19:00	19:00	19:00	19:00	14:00	14:00	14:00

F/Tパフォーマンス　チケット 2008 年 12 月 18 日（木）前売開始　※F/T 参加作品は対象外

■チケット取扱
フェスティバル/トーキョー（HP のみ）　http://festival-tokyo.jp
ぷれいす（電話のみ）　03-5468-8113（平日　11:00-18:00）
電子チケットぴあ 0570-02-9999（Pコード予約）http://pia.jp/t　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外
イープラス http://eplus.jp　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

・指定席の場合、開演時間に遅れたお客様はご指定のお席にお座りになれない場合がございます。
・未就学児童のご入場はお断りさせていただきます。
・受付開始及び当日券の販売は開演 1 時間前、開場は 30 分前からとなります。
・チケットの払戻、観劇日の変更はできません。
・チケット料金には消費税が含まれます。

F/Tパフォーマンスを、選んで観る。全部観る。誘って観る。学生も観る。
フェスティバル/トーキョーならではのお得なチケットでお楽しみください。　※フェスティバル/トーキョー・ぷれいすのみ取扱い

◇F/T 回数券　*選んで観る！*　※お好きな演目を選んでご覧いただけます。（『サンシャイン 63』は対象外）
3 演目　¥10,000　（¥3,333/枚）、5 演目　¥15,000　（¥3,000/枚）

◇F/T パス（13 演目）*全部観る！*　※全ての演目をご覧になれます。（『サンシャイン 63』は対象外）
¥30,000（¥2,300/枚）

※F/T 回数券、F/T パス（13 演目）のお取扱いについて
・2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）
・観劇演目・日時が未定でも購入できます。
・購入後は演目・日時のご予約を受付けます。
・予約なしでも当日ご入場出来ます。但し、満席時はご入場頂けない場合がございます。
・確実にご覧頂くためには演目・日時予約をお勧めいたします。
・回数券・パスはご本人様のみ有効です。

◇ペアチケット　*誘って観る！*
チケット 2 枚分の料金から 10%OFF でご購入頂けます。（例／¥4,500×2 枚＝¥9,000→¥8,100）
※2 名同日時観劇のみお受けいたします。 ※当日券のご用意はございません。 ※『演劇/大学 09 春』は対象外です。

◇学生料金　*学生も観る!*
学生　全演目 ¥3,000（要学生証提示）　高校生以下　全演目¥1,000
※東京芸術劇場中ホール公演は S 席　※当日でもご購入できます。

◇Port B セット券（『雲。家。』『サンシャイン 63』）　¥6,400　（¥3,200/枚）
※ぷれいすのみ取扱　※2 月 13 日（金）18：00 まで販売（限定枚数）

3 演目	¥10,000（¥ 3,333/枚）	F/T パス	¥30,000（¥ 2,300/枚）
5 演目	¥15,000（¥ 3,000/枚）	ペアチケット	10% OFF

フェスティバル/トーキョー09 春　開催概要

名称　フェスティバル/トーキョー09 春
Festival/Tokyo 09 spring

会期・会場　2009 年 2 月 26 日（木）〜3 月 29 日（日）
東京芸術劇場　中ホール　小ホール 1・2
あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
にしすがも創造舎

プログラム　F/T パフォーマンス　14 演目
F/T 参加作品　5 演目
F/T プロジェクト（シンポジウム/ステーション/クルー）

主催　東京都
財団法人東京都歴史文化財団
フェスティバル/トーキョー実行委員会
豊島区、財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

共催　社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター

事業共催　国際交流基金

協賛　アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

助成　財団法人アサヒビール芸術文化財団

後援　外務省、社団法人日本芸能実演家団体協議会、社団法人日本劇団協議会

協力　東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、社団法人豊島法人会

宣伝協力　株式会社ポスターハリス・カンパニー

平成 20 年度文化庁国際芸術交流支援事業

提携事業　東京芸術見本市 2009

写真/クレジット一覧

『ユートピア?』
アーティスト・ポートレート （撮影： ©Fred Kihn）
平田オリザ （左） アミール・レザ・コヘスタニ （中） シルヴァン・モーリス （右）

演出家 3 人 （撮影： ©Fred Kihn）

演出家・出演者打ち合わせの風景 （撮影： ©Fred Kihn）